

トロイア討滅作戦

征嵐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

煩惱の姫様作、「トロイア討滅作戦 全録」のワンシーンを勝手に作つたものです。

制作許可を下さつた煩惱の姫様、ありがとうございます。

トロイア討滅作戦

目

次

蛇足。或いは、後日談

14 1

トロイア討滅作戦

「はあ・。

意図せず、ため息が漏れる。

時刻は夜の8時を回ったところ。私の普段から使っている酒場が——いや、酒場に限らず、食事処であれば盛況しているであろう時間帯。例に漏れず、人と活気に満ちたこの場にはおよそ相応しくない挙動だ。

テーブルに頬杖を付き、周囲に軽く目を走らせ、私は再度ため息をついた。

（人が増えたな・。）

それ自体は喜ばしいことだ。魔界に人が増えることで経済は回り、魔界の寿命も伸びるというもの。だが、人が増えるということは、つまり、母数が増えるということだ。母数が増えると、”一定確率”の「一定」の部分が肥大化してしまう。何が言いたいのかというと、だ。

（民度の低下は避けられない、か。）

「クラスに一人はいる頭の悪い煩い奴」が、母数が増えることによつて「クラスに一人」だからこそ「頭の悪い煩い」という面が「エンターテイナー」という肩書きに置換されていた奴が、「ただの頭が悪い煩い奴」になつてしまふ訳だ。

（自分語りはその辺にしておけ・誰もお前に興味なんかないから・。）

可哀想なヤツから視線を切り、ジョッキを空にして立ち上がる。そろそろ帰ろうと思って取った動作だつたが、その動作はすぐに凍り付いた。酒場の扉を勢いよく開けて、誰かの魔剣が入ってきたからだ。その魔剣は、人混みを縫つてマスターの元に行くのが億劫だつたのか、入り口で声を張り上げた。

「マスター!! 新しいイベントだつてー!!

即座に、数人の魔剣使いが酒場を飛び出す。検証班とランナーたちだろう。それに先んじて酒場を去つたのはランカーたちだ。動きが違う。

(私は、詳細だけは把握しておきたいしな。私も行くか。)

ぞろぞろと、魔剣使いたちの波に乗つて魔界ギルドへ向かう。特別なクエストが貼り出される掲示板の前まで、人の流れの案内に従つて移動すると、意外にも、人は殆ど居なかつた。

(しまつた、出遅れたか。)

魔剣使いたちが初心者・ベテラン問わず全力疾走するほどの報酬でもあるのかと、背筋を冷やす。結論から言うと、違つた。貼り出されていたクエスト名はこうだ。

『トロイア討滅作戦』

トロイア、という名前には心当たりがあつた。”魔界の癒し”を自称する魔剣使いで、「煩悩の姫」と呼ばれているらしい。同じく魔剣使いの「煩悩の騎士」を従えているという噂も聞く。

称号を自称すること自体はそこまで珍しくもない。斯く言う私も、並み居る古参も、「初心者です」とか言うし。そんな理由もあつて、私はワザワザ同胞である「煩悩の姫」を討伐しようとは思わなかつた。が、クエストの詳細を読み進めていくうちに気が変わつた。数秒のうちに私の意思を曲げせしめたのは、クエスト内容の書かれた紙切れの一文。『ギルドイベントです。』というものだ。

(仕方ない、か。)

数ヶ月前までは、ギルドに入ることのメリットが見つからず一匹狼を気取つていたが、気の合う友人——と、勝手に思つている人に誘われたので、今では何となくではあるが、一応ギルドに入していく。そして、ギルドイベントということはつまり、『魔剣使いが連合を組んで戦うべき相手』ということだ。ともすれば死んでしまうかもしれない、というレベルの強敵ということでもある。

(まあ、あの人達が死ぬとは思えないけれど。)

命を賭けた総力戦なのだ。「気が乗らないので」という理由で、私を誘つてくれたギルドマスターを、そして、私を受け入れてくれたギルドの仲間を見捨てる訳にはいかない。

(それに・)

個人的に、「煩惱の騎士」とやらには訊きたいこともある。

魔剣使いが魔剣使いとなる——つまり、魔剣を振るうのには必ず理由がある。富を求めて。名声のために。或いは、誰かのために。

私は、魔剣を愛している。武器として、一人の少女として、人として。故に、私が魔剣を振るう理由などただ一つ。「魔剣たちのため」だ。

彼女たちが人として在りたいと言うのなら、私が命を賭して、魂を燃やして、彼女達を護るために闘おう。

彼女たちが武器として在りたいと言うのなら、私が彼女達を武器足らしめよう。その為になら、何億だろうと殺してやる。

私は、私のこの考え方の根幹というか前提に、「魔剣は意志をもつ者である」という思いがあることを自覚している。

だが、それは、どうやら「煩惱の騎士」殿にとつては違うらしい。“騎士”とは、己の誇りに懸けて、全てを賭けて誰かを守る者を指す。つまり、彼らにとつては、剣——武器というものは、誇りの象徴という抽象的側面を除けば、庇護すべき対象を守る為の道具でしかないということだ。魔剣を物として見るその在り方は、私に言わせれば、魔剣を解体し新たな魔剣を作り出そうとしていた、どこぞの研究者と変わらない。

「よし。征くよ、ジャガーノート。グラム。相手の属性は不明、弱点武器も不明——というか、相手も魔剣使いなんだ。かなり面倒な戦いになると思う。」

相手の属性が不明な場合は、闇属性か光属性。常識だ。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「で、どうしてこうなつた。」

また、ため息を付いた。

私が配置されたのは、戦略上の要衝——どころの騒ぎではない。正面だ。「煩惱の姫」は、何か目的があるのか、真っ直ぐにユグドラシリを目指しているという。そして、午後8時——対七罪王想定魔界統一模擬戦闘、通称、統一戦が開かれているこの時間帯では、「魔界少将」を初めとした対魔剣使いのプロフェッショナルは、軒並みそちらに回つてしまっている。残った魔剣使いの中で、魔界ギルドに顔を覚えられている順!!魔界滞在歴長い順でソートした結果、白羽の矢が立てしまった訳だ。

（みんなを死なせない為に参加したつていうのに・全く。まあ逆に、ここまで来たつて事は、道中の皆を倒してきたつて事だし、つまり。）

ここまで来たら、それはギルドの皆の、「第二魔界」の皆の、仇だということだ。——私の敵だ、ということだ。

そして、数時間の後。

「来ちゃつたか。残念だよ、『煩惱の姫』と、『煩惱の騎士』。お前たちで相違ないな？」

私の前には、既に全身傷だらけの男と、比較的傷の少ない、それでも苛烈な戦闘があつたのだろうと思わせる相様の女性がいた。一応以外の意味のない問いに、男は律儀に頷いた。女性の方はとすると、既に細かな装飾の施された、青い剣を構えていた。

（剣みたいなヴィジュアルだが・ニルヴァーナか。面倒だな。）構え方には無駄な隙がなく、その上「鎌」という武器種は、私と相性が悪い。
？

（男の方は・）

男の方は、少しだけ考える素振りを見せると、水を纏う槍を顕現させた。戦槍ミネルヴァ。知恵と戦の神アテナと同一視される女神、ミネルヴァを宿した——と、思われる魔剣だ。

（鎌に槍か。面倒極まるな・。）

どちらも手数とトリックな動きで相手を翻弄するタイプの武器

だ。槍はテクニカルな動きに加えて優れたスピードも有する武器だが、ただ速いだけならそこまで脅威にはならない。

「ここが魔鍵都市と知つての行いか？ 虎の威を借りるようで情けないが、ここには魔界少将を初めとした対魔剣使いのプロに加えて、魔剣機関、それに魔王まで居る。その門兵である私に弓を引くと云うことはどういうことか、説明の必要はあるか？」

「それで挑発のつもりですか？ 魔剣使い。」

残念。乗つてはくれないか。この程度で激昂されたら、それはそれで悲しいことだ。なんせ、最も重要な質問に答えて頂けなくなってしまう。

「いや、ほんの挨拶だよ。だが、貴女方が”敵”であることは確定した。ついでになんだが、貴女が”仇”かどうかも確かめさせて頂きたい。」

「…」

「道中に魔剣使いが沢山居たと思うんだが…そいつらは、全員倒して来たんだよな？」

（説得に応じた者もいれば、端から敵対しなかつた人たちもいました。ついでになんだが、貴女が”仇”かどうかも確かめさせて頂きたい。）
私の問いに、煩悩の姫は即答しなかつた。何事か考え込むような素振りを一瞬だけ見せると、やがて口を開いた。

「そうですよ。だから、貴方も退かなければ――」

「どうか。残念だよ、煩悩の姫。

貴女は、私の”敵”で、彼らの”仇”だ。

「おいで、グラム。」

魔力を吹き荒らし、右手の中に一振りの大剣を顕現させる。躊躇なく突っ込んでいた煩悩の騎士は、私が魔剣を顕現し終えるより速く、手にした槍を振るつた。だが、「変身中は無防備」なんて、そんなのは一昔前のヒーローだ。私は過去の存在でもなければ、ヒーローでもない。

「何つ!?」

煩惱の騎士が驚きの声を漏らす。その視線は、ミネルヴァの切つ先を握り止める私の左手に釘付けとなっていた。

魔導バリアを利用した手品のようなモノで、ある程度の技量があれば誰でもできる上に、意表を衝く程度にしか役に立たない技術だが、意外と彼には「受けた」ようだ。

残念ながら、背後の——私の背後の彼女にとつては、珍しくもない光景のようだが。

「アクタル、そのまま彼を引き留めていてください。」

右肩越しに後ろを見る。その動作のままに、顕現を終え完全に実体を持つた大剣を振るい、迫る蒼の剣を弾く。

「はあッ!!」

続いて、二撃。上段に弾いた剣を、そのままもう一度振り降ろしてくる。それを大剣の腹を滑らせて下へと受け流す。

続いて三撃目。下から逆袈裟に掬い上げられる剣を、横からグラムを当てて払い除ける。

四撃目。脇を締めた鋭い突きが、鳩尾を目掛けて繰り出される。

突きと言うのは面倒な攻撃だ。少なくとも後退が煩惱の騎士という壁によつて封じられている今は、弾くより他はない。が、ニルヴァーナ相手だと、それすらも出来ないというのが辛いところだ。

「うわっ!?」

「きやつ!?」

ミネルヴァの切つ先を握り直し、思いつきり振り回す。魔剣グラム——大剣を振るうのに最適化された身体は、その腕力で以て、煩惱の騎士を正確に煩惱の姫にぶつけ、吹き飛ばした。

「グラム、損傷は?」

『ニルヴァーナと触れた部分が少しだけ熱を持っているけれど、欠けや傷はないわ。大丈夫よ、マスター。』

それは良かつた。

「くそ・大丈夫か? 姫様。」

「大丈夫です。あの魔剣使い、どうやらニルのことを知つてゐるみたいですね。」

二言、三言交わすと、二人は立ち上がり、また武器を構えた。先ほどとは違い、煩惱の姫は剣の先端付近から魔力を放出していた。力場として作用するほどに濃密な魔力の流れは、特定の形を象っている。もはや、それは剣ではなく鎌となつた。

鎧競り合えば、瞬く間にあの魔力の刃が顕現し、腕なり首なりを切り落とすという訳だ。運用方法としては素晴らしいが、相手がニルヴァーナのことを知つていれば、効果は半減する。先の私のように、徹底して弾き、受け流せば良いだけなのだから。

「行くぞ。煩惱の姫と、その騎士。」

十数歩の距離を跳躍して詰め、一撃見舞う。流石に騎士を名乗るだけあつて、素早く煩惱の姫を庇つた煩惱の騎士のミネルヴァによつて、上段からの切り下ろしは受け流された。即座に煩惱の姫が背後を取り、鎌を一閃する。攻撃を受け流されて崩れた姿勢ではどうしようもない。甘んじて一撃、とはいかない。なんせ、相手の魔剣はニルヴァーナなのだ。物理攻撃としても優秀だが、その真骨頂は斬撃に付随す精神攻撃にある。ソウル——魂を利用して魔剣を使う私たちにとつては、かなり痛恨の一撃となるだろう。

「悪く思わないでくれ。プリンセス。」

流れた姿勢をより崩し、流れに従つて足を振り上げる。踵に小気味良い感触を感じると共に、背後を取つていた煩惱の姫が吹き飛んだ。顎を蹴り抜いた左足をそのままに、その勢いすら利用して右足も踏み切る。前方宙返りを決め、ポーズを取る間もなく背後へとグラムを一閃する。

「お前!!」

突き出されたミネルヴァの切つ先と、グラムの刃が拮抗する。スピードとトリツキーな動きが売りの騎槍型魔剣で大剣と張り合おうとは、片腹痛いことだ。

「ぐうッ!」

グラムを振り抜き、丁度、煩惱の姫が吹き飛んだ辺りに向けて、煩惱の騎士を吹き飛ばす。

「・なんでだ?」

思わず口走る。どうしてこの程度の魔剣使いに、彼らは倒されたのか、と。

「そりやあ、まだ、本気じゃありませんからねー。」

「だが姫様、そりや向こうも同じっぽくないか？」

「先に発動して、向こうが発動するより先に決めればいいんですよ。ほら、一緒に。」

魔剣を顕現させたことで強化された身体は、頸を蹴り抜かれようと、二度に渡つて吹き飛ばされようど、未だに健在のようだつた。

「ニルヴァーナ、『極化』!!」

「ミネルヴァもだ、極状態、解放!!」

「・チツ」

舌打ちを漏らす。面倒なことだ。そそここ面倒な連携だったが、さらに『極化』で魔剣のステータスを大幅に強化されると、余裕が無くなる。私一人なら、だが。

「グラム、片方任せよ。おいで、ジャガーノート。」

『いいですよー、マスターさん。』

「ええ。私はどっちを持てばいいのかしら？ マスター。」

グラムが魔剣少女として顕現し、私が差し出した大剣の柄を握る。代わりに、私の右手には、羽のような刃をもつ戦斧が握られていた。「姫様の方を頼む。私が騎士を抑えよう。聞きたいこともあるしな。」

「良いわよ。マスター、言つておくけれど、負けたら承知しないわよ。そうね・恒久的ブキダス禁止刑に処すわ。」

「あつはい。」
さて。

「なあ騎士殿。一つだけ聞いていいか？」

「なんだ？ いきなり。」

「魔剣について、どう思う？」



「煩惱の姫、だつたかしら。」

”

「ええ。そういう貴女は、彼の魔剣・魔剣グラム”ですよねー？」

「あら、存外に目が良いのね。言つておくけれど、私達には精神攻撃

は通用しないわよ？」

「へえ？ そうなんですか？」

二人が笑みを交わす。それは敵同士が向けあつて然るべき空虚なモノではなく、本当に心の籠つたものだつた。戦場で剣を突き合わせた者同士は、稀に「ふと、相手が歴年の親友であるかのように、何を思ひ、何を感じているかが心の中に入つてくる」ということ経験するらしいが、その類いだろうか。

「ちなみに、理由をお聞きしてもー？」

「手の内を明かす訳がないでしよう？ でも、そうね・彼は、”狂つている”から。」

煩惱の姫が目を細め、グラムが薄い笑いをこぼす。

「勿論、ブラフかもしれないけれどね？」

「そうですよねー。——では、お喋りもこの辺にしましようか。このままだと、もつと強い人達が来ちゃいますからねー。」

「そうね。手柄を横取りされるというのも、あまり好きではないし何より、マスターが決めたことだもの。彼の魔剣として、私は従うだけよ。」

「貴女を倒して、私は先に進みます。」

「貴女を倒せば、私は彼の役に立てるのかしら？」

二者が同時に地面を蹴る。始めに繰り出されたのは、鎌を用いた突き——というより、殴打だつた。刃の反対側、峰にあたる部分が、グラムの鳩尾を目掛けて疾走する。回避しようと、鎌という武器の特性上、軸となる柄を回転させて、ある程度は対応されてしまう。故に、ガードするしかない。

だが、ガードすれば、剣と身体の間に、湾曲した鎌の刃がヌルリと滑り込み、剣を引っ張つてガードを崩してしまつ。この様なトリッ

キーな動きこそが、グラムのような純粹なパワー・タイプには苦手とするところだった。

「面倒よ。散りなさい。」

だが、トリツキーな動きをするには、素早さと正確性——つまり、「いかにスピードを制御するか」というのが重要で、スピードを制御したければ、その制御にも当然、力を割かなければいけない。単純なことだが、全力でスピードを出せばいいというモノでもない。逆にスピードが無き過ぎるとどうなるか。明快だ。死ぬ。

「きやつ!」

崩されたガードの奥から、グラムの左手が伸びる。拳の形に固められたそれは、その細さからは考えられないほどの力で以て、三度、煩惱の姫を吹き飛ばした。

「マスターも本気のようだし、ね?」

グラムの持つ大剣は、いつの間にか形状を変え、ドレスもデザインを異なるモノへと変化していた。

波打つ刀身は枝分かれした禍々しいものへ。ドレスは、白黒のものから、水色を基調としたものへ。

——顕現『魔劍グラム【極】』



「仲間を守る為の道具」と、そう考えていた時期もありますよ。でも、今は――

今は、なんなのか。それを聞くより早く、私は加速していた。

今は、違う? なら、騎士を続ける意味が分からぬ。どうだつていい。この質問に、元より大した意味など無いのだから。勿論、私の好奇心を満たすためというのもあるが、一番の理由は、隙を作るため

だ。このまま行けば負けるとは思えないが、なんせ、道中にいた筈の魔剣使い達を廻殺してきたであろう強者だ。だからこそ、もはや惜しみはしない。

「ジャガーノート、極化。グラムもだ。速攻で決めよう。」

手にした戦斧の形状が変化し、筋力や敏捷性の補正値が増大する。一撃を確実に叩き込めば、冥獣であろうと葬り去れるほどの威力を込めて、戦斧を振るう。

「くつ!?

並の魔剣であれば破損に追い込める、属性有利であれば魔核に達するレベルの一撃を、煩惱の騎士はミネルヴァの柄で防いでみせた。防御力上昇系の記憶結晶だろうか。

「なんで、武器の特性的にはこっちが有利なはずなのに!!」

叫びながら、今度は煩惱の騎士が刺突を繰り出していく。極化した魔剣のステータス補正を十全に受けた一撃は、先程のモノよりも鋭く、魔導バリアに頼ったガードは危険だと一見して分かるほどの速さだった。

「チツ」

戦斧という取り回しにくい武器で攻撃した以上、すぐさまガードに転じることは難しい。ニルヴァーナとは違つて一撃がそこまで致命的ではないと判断し、出来るだけ身体をずらして受ける。脇腹から少量の血が吹き出し、ミネルヴァから湧き出している水の中へと消えていった。

「私の強さのタネなんて、もう少し強くなれば直ぐに分かる。上位勢なら誰だつて知っていることだよ。古参なら、もはや感覚的に理解出来るだろうな。」

そう、少しカッコつけて言つたときだつた。

「バーニングハート。魔剣と絆を結ぶことで、性能を底上げしてい

るんです!! アクタル、貴方にも可能なはずよ!!」

煩惱の姫が、満身創痍になりながら叫んだ。あちらもあちらで、グラムが優勢らしい。試合に勝つて勝負に負けたような空しさが漂つているが、きっと気のせいだ。そうに決まつていてる。

「バーニングハート。魔剣と、絆を。」

目を閉じてしまつた煩惱の騎士は、動きすら止めている。大きすぎる隙だが、私には、その隙を衝くつもりは毛頭無かつた。

「どうして、俺を攻撃しなかつたんですか？」

やがて目を開いた煩惱の騎士は、静かにそう問いかけた。なに、単純なこと。

「魔剣がバーニングハート状態になる。絆を結ぶというのは、魔剣使いが魔剣のことを大切にしていないと出来ないことだ。魔剣をこまめにメンテナンスし、魔力をきつちりと補給して、幾度となく戦場を潜り、生還する。素晴らしい思い出の発露を、この私が邪魔する訳がないだろう？」

「ありがとうございます。」

「ああ。騎士殿、ああ、姫君。貴女も至つたか。——あなた方が、魔剣を大切にしているということは理解できた。だが、それはそれだ。」

先程とは比較にならないほどの劍氣と霸氣を纏う二人に、手にした戦斧を突きつける。翼のような刃をもつその戦斧は、徐々にその形状を変化させていた。

「皆の仇は、討たせて貰うぞ。来い、ルナ。」

——ジャガーノートの魔核が唸りを上げる。

魔核に膨大な魔力が満ち、やがて、魔核そのものを一段階ランクアップさせる。

魔核覚醒。ジャガーノートは、ジャガーノート＝ルナへと。同一の存在にして、全く別の存在へと変生した。

——顕現。騎槍『ジャガーノート＝ルナ【極】』

「戻つてこい、グラム。ルナを全力運用する。」

他に魔力を回す余裕がないほどに、ルナに魔力を流す。

「バーニングハートに至つた、貴殿らの魔剣愛に敬意を。その証として、私も全力でお相手しよう!!」

◆ ◆ ◆

次に私が目覚めたのは、病院のベッドの上だった。近くのベッドには、死んだと思っていたギルドの皆も寝かされていて、私は安堵のため息をついた。

私は負けた。ただ、それだけだ。だが――悪くない。バーニングハートによるステータスの向上は、交わした糸の質と量に依存する。その法則に従えば、私と同格か、ともすれば――いや、それは無いな。私は、私の魔剣への愛が、誰にも負けないと信じているのだから。だが、それでも。

「煩惱の姫と、煩惱の騎士か。」

私は、口角が上がるのを抑えきれそうになかった。

蛇足。或いは、後日談

私は、煩惱の騎士との戦闘で負つた傷を癒すという名目で、長めの休暇を取っていた。

あの二人との戦いは苛烈だつたし、互いに、魔剣を使つて戦う以上、死を覚悟していた。傷の一つや二つ、想定の内だ。——とはいえ、負けるつもりなど毛頭無かつただけに、私の精神的ショックは大きかつた。少なくとも、表面上は完璧にいつも通りだと自負していた私の渾身の演技を、グラムが「マスター。やせ我慢なんて、私たちに通じる訳がないでしよう?」と切つて捨てる程度には。

だから、その、建前と言ひ換えてもいい「名目」は、あながちでつち上げという訳でもない。たとえ肉体的な傷は一週間ほどで治つても、だ。誰が何と言おうと。私はこの機会を逃すつもりはない。この、「グラムとジャガーノートの水着姿を見る」という目的を果たす、絶好の機会を——!!



時は少し遡り、数日前。私は菓子折を持つて、第二魔界の森のなかにひつそりと立つた屋敷へと来ていた。

「マスター。もう一度聞くけれど、本気で言つているの?」

「一度と言つて、もう五回くらい言つているよ、グラム。まあ、君の声が何度も聞けるから、私は一向に構わないが。」

「その煙に巻くような答えも、もう4回聞いたわよ。マスター。」グラムはうんざりとした様子で、数歩後ろに立つてはいる。乗り気ではない、どころか、否定的なのが手に取るように分かる。と、いうか、表情が雄弁すぎる。

「まあ気持ちは分かるよ。なんせ、君を、この私を、私たちを負かした相手の、その本拠地に来ているんだから。」

この屋敷に住まう者は、魔剣を除き、人間だけを数えるなら、女が一人と、男が一人。名は知らないが、通り名ならそこそこ有名で、私

と因縁のある——つい先日、因縁の出来た相手である。彼女たちは、こう呼ばれる。

「煩惱の姫」と、「煩惱の騎士」と。

トロイア討滅作戦の折、刃を交え——私を下した相手だ。

暴走魔剣を匿ったか、靈獸となりつつあるか。理由などどうでもよかつた。ただ、私の仲間を切り伏せて来たのなら、その仇を討つまで。そう判じて挑み——負けた。後に聞けば、アレはただの誤りだつたと

いうから笑えない。

- ・魔界ギルドの担当官は、誤報の代償として二度と笑えなくしたが。私の魔剣を、正当な理由なく戦場に送り出したのだ。報いは受けてもらう。

と、まあそれはさておき、私は、その私を破つた者たちの片割れに、『煩惱の騎士』に会いに来ていた。彼が私を下すに至つた決定打、「バーニングハート」。魔剣と深い絆を交わした証左に、私は敬意を持つていた。同時に、同族感も。つまり、何が言いたいのかと言ふと、だ。

お前とは美味しい酒が飲めそうだ、と、そういうコトだ。

「付き合わされる私の身にもなつてほしいわね。」

「ははは、観念しろグラム。」

お互い、自分の魔剣について、「ここすき」「ここすき」と、語り合おうじやないか。そう思つて、ワザワザ森を抜けて來たのだから。道中の魔物の鬱陶しさには気が滅入つた。なんだつてこんな辺鄙な場所に居を構えているのか。途中、冥獸にすら遭遇したというのに。

ドアノツカーや三度鳴らす。少し待つと、中から人の近づいてくる氣配がした。

「はいはい、どちら様ですかーっと・ん？」

「久しぶりだな、煩惱の騎士。この前は世話になつた」「マスター、それじや完全にお礼参りの口調でしよう。」

警戒心も露にこちらを見ている騎士殿。魔剣も顕現させないで、何をしているのか。戦うつもりなら、せめて武器だけでも持つておくべきだ。——あ、いや、こちらは確かにグラムを顕現させているが、こ

れは戦う意志があるわけではなく。あたふた。

「それもそうか。安心してくれ、騎士殿。こちらに戦う意思はない
あ、これ、つまらないモノですが。」

「は？　あ、どうもご丁寧に。」

グラムの顕現を解き、軽く腰を折つて菓子折を差し出す。中身は私の愛飲する、最強にして最高の炭酸飲料。ジャンクの中のジャンク。合成甘味料とカフェインを炭酸で流し込むクレイジー・ドリンク。ペ●シのストロングゼロだ。ツマミとして、こちらは純然たる砂糖の塊、メン●スを用意した。

さあ、胃で科学実験をしよう。

「えっと、何しに来たのか分からないうが……とりあえず中にドウゾ」とりあえず中にドウゾ？」

「お邪魔します。ところで、主は居られるか？」

「なんでしょうが、こんな辺鄙な所まで、わざわざ訪ねてくる要件とは。」

騎士殿に聞いたつもりが、いつの間にか側に来ていた姫君から返事がくる。

・よく考えたら、わざわざ冥獸すら出没する森を抜けてこんなところまで来る必要は無かつたのでは？　いやいや、ここまで来てようやくソレに思い至るとは。アホか。だが、まあ、ギルドマスター以来の、美味しい酒が飲めそうな奴に出会つたんだ。親睦を深めておくに越したことはない。彼らを倒し、この私を倒す程度には、戦力として有用なのだし。

「いや、なに？ 少し、彼と話したいことがあって、ね。」「アクタルと。」

煩悩の姫が小首を傾げる。青色の髪を揺らして、さらに一言。「それは、”話がある”という事でしょうか？」

同じ言葉だが、ニュアンスが違う。「外に行こう」と「表に出る」くらいの、というか、そのものだった。僅かに姫君から漏れる敵意に、ジヤガーノートが敏感に反応している。

『どうしますかー、マスターさん？』

「落ち着いてくれ、私にそんな意図はない。彼に渡した菓子折を見

てもらえば分かるが、アレだ。単に親睦を深めに来ただけだよ。」

徒歩で。森を抜けて。道中の魔物を廻殺しながら。

正直、今度酒場で見かけたとき、とかでも良かつた気はする。

「ペプ●コーラ・」

全くもつて理解できない。そんな声が背後から聞こえてきた。同様の表情を浮かべた姫君が、二、三回首を振つて、仮面じみた笑顔を貼り付けた。

「では、そこのテラスで——」

「まあ、待つてくれ。私から提案がある。」



「——で、何処ですか？　ここは」

「ご存知ないか？　ここは——『リゾルタ海岸公園』だ。」

いえ、そういうコトを聞いているのではなく。と、姫君は頭痛を堪えるように頭に手を当てた。その隣で、本氣で理解できないモノを見る目をした騎士殿が立っている。

燐々と照り付ける太陽の光が、白い砂浜に反射し、全身を焼く。だが、一分と掛からずに到達するであろう波打ち際には、白く泡立つ海水が、透き通った色の沖合いにまで、冷たそうな水を延々と湛えている。まあ、つまるところ。

「分かりやすく言おうか。ここは——海だ。」

「それは流石に分かる。」

では、各自、持参した水着に着替えてくれたまえ。解散！！
と、できれば一番良いのだが、何も言わずに引っ張ってきたからそうはいかない。ここで無責任に放り出すのは流石にアレだ。

「あそこに男性用更衣室があつて、反対側が女性用。トイレは更衣室の隣にあるから、絶対海中でするなよ。分かるらしいから。軽食は海の家がオススメかつ安パイだな。浮き輪の貸し出しとかパラソルの貸し出しあつてやつてる。——一応言つておくが、マタタビは絶対に買うな。」

?

「マタタビ・ いや、それ以前に、なんでこんな所に——」

「さあ行け、行動開始!!」

私は騎士殿の背中を押して、グラムとジャガーノートが姫君の手を引いて、それぞれ更衣室に入つていく。

ロツカーに脱いだ服を詰め込みつつ、騎士殿の様子を伺うと、凄まじく警戒した視線を向けられていた。

「・ な、何か?」

「・ どういうつもりだ、お前。」

「・ 質問の意図が分からないな。」

「とぼけるなよ。俺たちに負けたから、復讐しに来たんだろう!? こんな回りくどい手を使つて、俺たちに武装を解除させて!!」

——は?

「凶星か? やっぱり、お前は——」

騎士殿の手に、小太刀が顕現する。魔剣なのは確実だが、そこまでの驚異では——つて、しまつた!? グラムもジャガーノートも女子更衣室だつた!?

「ここで倒すッ!!」

居合い。抜刀術。その技術を言い表す言葉はなんでもいい。鞘から抜かれた刀は、その勢いのまま、私の首を目掛けて疾走する。グラムが異変に気付くより、ジャガーノートが一端顕現を解き、私の元へ再度顕現するより、その刃が私の首に触れる方が早い。

が。

別に、その刃が私の首を打ち据えたところで、特に意味はない。

金属音を立てて、刃が火花と共に弾かれる。驚愕の表情を浮かべた騎士殿が、ロツカールームの端まで後退した。

「驚いたか? 魔剣もナシに、魔導バリアが張れるつていうのは、一種の裏技なんだが。」

と、いうより、チートに近い。この手の技術を使える——いや、知っているのは、考察班と呼ばれる研究者チームくらいなものだ。あるいは、狂つてしまつた者か。これは、触れてはならない、理性の奥。狂気の真髓によつてもたらされた、「狂人の洞察力」とでもいうべき、脳

の回転の産物。

「タネ明かしをすると、コレ、体内の魔力が暴走した副産物なんですよ。常に魔剣を顕現させてるみたいな状態だから、魔力が減るわ減るわ…で、まあ、コレの原因なんだけど。」

全てを狂わせる魔剣、ジャガーノート＝ルナ。単なる魅了だけではなく、クトゥルフ神話勢のような「狂氣」から、物理的な「狂い」まで、どんなタイプの「狂氣」であろうと、彼女はソレを司る。――のだが、「見ただけで狂う」という一番厄介な性質にだけは、何故か「魅了」以外の狂氣が乗らない。おそらくはソレが基本の性質であり、それを曲解して「狂氣を司る」という能力になつてているのだろうが、まあ、つまり。その能力が、一番強力だということだ。

「確かにルナは魅力的だ。だが、私は、その狂氣を受け止め切れなかつた。彼女に狂わされてしまった。」

自分の理性の、野性の、自分という人格の最奥たる狂氣を受け止められる人間など、そういうない。魂という絶対のキヤパシティを、三本もの魔剣で埋めている私には、まず無理だつた。

だといふのに、何をトチ狂つたか、私はある実験をした。それは。「鏡を使つて、ルナが発する狂氣の光を全部私が見てみよう。」

といふもの。結果はお察しの通り、精神だけでなく肉体まで狂う始末。一番笑えるのは、この実験をしたのが、この前の戦いで入院している間だということだ。暇で暇でどうしようもなかつたからね。仕方ないね。

「で、まあ、らしくもなく、こうして君たちを誘つて海に來てるといふ訳だ。恐らく、前々から思つていた『ジャガーノートとグラムの水着が見たい』という深層の欲望が、狂氣によつて発露したのだと思われる。」

「理性的な狂氣を感じた。」

上手いこと言う。まあ、アレだ。

「悪いが、この狂氣が収まるまで、付き合つて貰うぞ。なに、君とは美味しい酒が呑めそうだというのも、また狂氣が汲み上げた私の本心だ。」